

# センチクバエ幼虫による蠅症について

比嘉ヨシ子・岸本高男・加藤七五三子<sup>1)</sup>・大城真佐子<sup>1)</sup>・池城毅<sup>2)</sup>

## A Case of Gastro-intestinal Myiasis Caused by Larvae of *Boettcherisca peregrina* (Robineau-Desvoidy, 1930)

Yoshiko HIGA, Takao KISHIMOTO,  
Shimeko KATO, Masako OSHIRO and Tsuyoshi IKESHIRO

### I はじめに

ハエ類の幼虫が人畜に一時的、あるいは長期間寄生し、組織や器官に何らかの影響を与えた状態を蠅蛆症 Myiasis と称し、国内でもこれまでに数多くの報告がなされてきた。特に消化器蠅症ではニクバエによるものが多く、臨床症状が顕著であることが認められている。

沖縄県においては、これまでに家畜（新生牛）の Myiasis 例として、町田ら（1965）の報告はあるが、人体への症例は、ほとんど報告がなされていない。今回、宜野湾村字惣慶在の特別養護老人ホーム・でいご園において、偶発ハエ寄生例を経験したので報告する。

### II 症状及び経過

症例：山〇カ〇 82才 女

1978年10月16日 卒中後遺症（両下肢マヒ寝たきり、言語障害）とパーキンソン症候群で入園。

1982年12月13日 蠅幼虫が排便時に肛門部より13～15匹、吸血した状態で排出し、さらに2日後に1匹排出した。血液像の検査が行われないうちに、患者は12月17日に死亡した。血液検査の一般項目を表1に示す。

表1 山〇カ〇の血液検査状況

検査項目	5月19日	12月17日
WBC	3,800	14,000
RBC	350万	396万
Ht	34	42.5
H6	11.8	14.2

1) 清明会 清明診療所 2) 沖縄県予防医学協会

### III 幼虫の飼育と同定

1982年12月13日に、患者の排出した蛆虫が吸血した状態であり、体内寄生が想定された。検体は水分を含ませた脱脂綿をシャーレに入れて、その中に生きたまま保存し、12月14日に予防医学協会を経て、沖縄県公衛生研究所に同定依頼されて

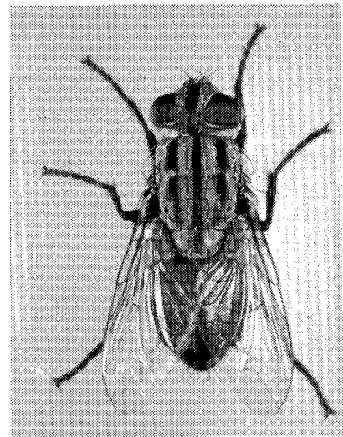


図1 センチクバエ成虫

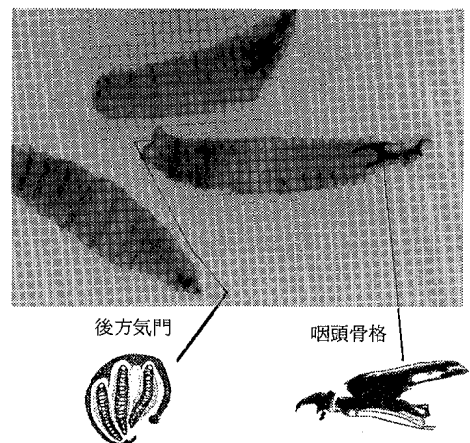


図2 センチクバエ幼虫

表2 でいご園周辺にみられる初夏のハエ

種 類	畜 舎		
	牛 舎	鶏舎(A)	鶏舎(B)
イ エ バ エ	4	66	73
フタスジイェバエ	1		
オビキンバエ	2	2	44
トウヨウカトリバエ	1		
サ シ バ エ	15		
アメリカミズアブ	1		

昭和58年5月18日

来た。

持ち込まれた3匹の蛆虫は、一見してニクバエ科の3令幼虫であることが明らかであった。幼虫は活発に運動していたので、2匹は実験動物用固型飼料30gを少量の水と混ぜ合せた培地中に飼育し観察した。他の一匹は、スライド封入標本とした。

封入標本を鏡した結果、後方気門のキチン環にボタンを欠き、ボタンの位置で接続せず開いており、ニクバエ科の特徴を示していた。咽頭骨格は歯状骨や副口骨、背角や腹角の長い窓の開きぐあいなどからセンチニクバエ *Boettcherisca peregrina* であることが推定された。

室温20°Cで飼育観察中の2匹は12月17日に蛹化し、その後、19日目の1983年1月4日に雌一匹の成虫が羽化した。同定の結果センチニクバエであった。

#### IV 考察

1903年から1968年までの65年間にわが国の偶発蠅症は102例で、症例別では耳蠅症49例に次いで、消化器系蠅症が36例と2番目に多い事例として報告されている。また、蠅症の起因種について、これまでの事例からみると、約20種が関与している。そこで、ハエの発生条件に適した本県においては、その種類も多く約87種が記録されているが、その中で蠅症に関与しやすい身のハエ類はイエバエ、クロツヤハナバエ、ヒロズキンバエ、ホホグロキンバエ、オビキンバエ、センチニクバエ、ゲンロクニクバエ、シリグロニクバエ、ホシチョウバエ、オオキモンノミバエ、コシアキノミバエ、ショウジョウバエなど12種が生息し、発生源も身近にある。したがって、これまでも人蠅症の機会があったと

思われるが、ほとんど報告されていない。

本種はユーラシア大陸、日本からニューギニアにかけて広く分布し、沖縄産ニクバエ科の最も代表的な種類である。便池、畜舎、人畜の糞、動物の死体、厨芥などに発生し、県内でも通年発生がみられる身近のハエで特に夏季に多い。

センチニクバエなどのニクバエ類の多くは胎生で1令幼虫を産むために、ハエ蛆症を起こしやすい。今回、ハエ蛆症の発生した宜野座村惣慶部落は村内でも特に、畜舎群の多い地域であり、でいご園は畜舎にとりかこまれるような環境にあった。したがって、畜舎のハエに対する苦情も深刻である。

でいご園周辺の環境は鶏舎、牛舎、豚舎などの畜舎群が集中し、畜舎のハエ類の施設内群飛が問題となっていた。畜舎を発生源とする蠅症に関与しやすい蠅類は、5月の採集ではイエバエ、フタスジイェバエ、オビキンバエなど3種(表2)であった。また採集可能な種類として、クロツヤハナバエ、センチニクバエ、ホシチョウバエ、ノミバエ類、ショウジョウバエなどがあげられる。

一方本症例と同様に1980年9月19日に86才の男性の消化器蠅症患者が同施設内で発生している。加害種については標本が保存されていないので不明であるが、消化器蠅症を惹起しやすいセンチニクバエかオビキンバエではなかったかと思われる。この施設は何んらかの障害を持った特別養護老人ホームであるだけに、蠅と接触する機会も多く、今後も蠅症の起り得る状態にあり、しかも環境衛生面の十分な配慮が必要であろう。

#### V まとめ

1982年12月14日に特別養護老人ホーム、でいご園において、消化器蠅症が発生した。

1. 蠅症を惹起した種類はセンチニクバエ *Boettcherisca peregrina* であった。
2. 蠅類の発生条件に適した本県には、人蠅症を惹起しやすい種類が身近に多い。
3. 人蠅症の報告例として初めての記録である。
4. 蠅幼虫の侵入経路としては、本症例が卒中後遺症とパーキンソン症のため、口からの侵入があったものと想像される。

## VI 参考文献

1. 森川達二. “蠅症に関する研究 第1報 日本における人体蠅症に関する文献の考察”. お茶の水医学雑誌. *Vol. 6*, No.11, *p.*77-99(1958).
2. 森川達二. “蠅症に関する研究 第II報 ラットによる消化器蠅症の実験的研究”, お茶の水医学雑誌, *Vol. 7*, No.10. *p.*1-13 (1959).
3. 加納六郎. 他3名, “同定依頼を受けた蠅症の記録”. 衛生動物誌. *Vol. 13*, No. 1, *p.* 96-97 (1962).
4. 上村清. “ホシチョウバエの眠寄生と思われる1症例について”. 衛生動物誌, *Vol. 18*, No. 4, *p.*305-306 (1967).
5. 金子清俊他3名. “クサニクバエ幼虫による新生児の耳蠅症について”. 衛生動物誌, *Vol. 19*, No. 4, *p.*248-252 (1968)
6. 町田宗純, 高江洲義弼. “オビキンバエ属幼虫による新生牛の *Myiasis* について”. 琉球政府家畜衛生試験場研究報告, No. 6, *p.*20 (1965).
7. 佐々学他4編. “南西諸島の医動物”. 新宿書房. 東京. *p.*211-234 (1977).